

十勝岳の火山活動解説資料（平成28年1月）

札幌管区気象台
火山監視・情報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にありますので、今後の火山活動の推移に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴煙などの表面現象の状況（図1- ~ 、図2 ~ 6）

15日に実施した上空からの観測（第一管区海上保安本部の協力による）では、62-2火口や大正火口の状況に特段の変化はみられませんでした。2015年6月の現地調査以降に確認されている振子沢噴気孔群の地熱域や前十勝の列状の噴気に対応する融雪域が認められており、62-2火口とその周辺では熱活動がやや高い状態が続いていると考えられます。

遠望観測では、62-2火口の噴煙の高さは火口縁上200m以下、大正火口の噴煙の高さは火口上200m以下、振子沢噴気孔群の噴気は概ね50m以下で経過しました。大正火口の噴煙量は2010年頃からやや多い状態が続いています。

- ・地震及び微動の発生状況（図1- ~ 、図7 ~ 8）

62-2火口付近のごく浅い所（海拔0 km以浅）を震源とする火山性地震は、1日あたり概ね10回以下と少ない状態で経過しましたが、長期的にみると、2010年頃からやや多い状態となっています。

一方、グラウンド火口周辺や旧噴火口付近の浅い所（海拔下0 ~ 3 km程度）を震源とする周辺の地震活動は、引き続き低調に経過しました。

火山性微動は観測されませんでした。

- ・地殻変動の状況（図9 ~ 10）

GNSS連続観測¹⁾では、2006年以降、62-2火口直下浅部の膨張を示すと考えられる変動が引き続き認められています。

より深部へのマグマの供給によると考えられる地殻変動は認められませんでした。

1) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

2) 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感知して温度や温度分布を測定する計器で、熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

この火山活動解説資料は、札幌管区気象台のホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。

この資料は、気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、北海道大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平26情使、第578号）。また、同院発行の『電子地形図（タイル）』を複製していません（承認番号 平26情複、第658号）。

今回の火山活動解説資料（平成28年2月分）は平成28年3月8日に発表する予定です。

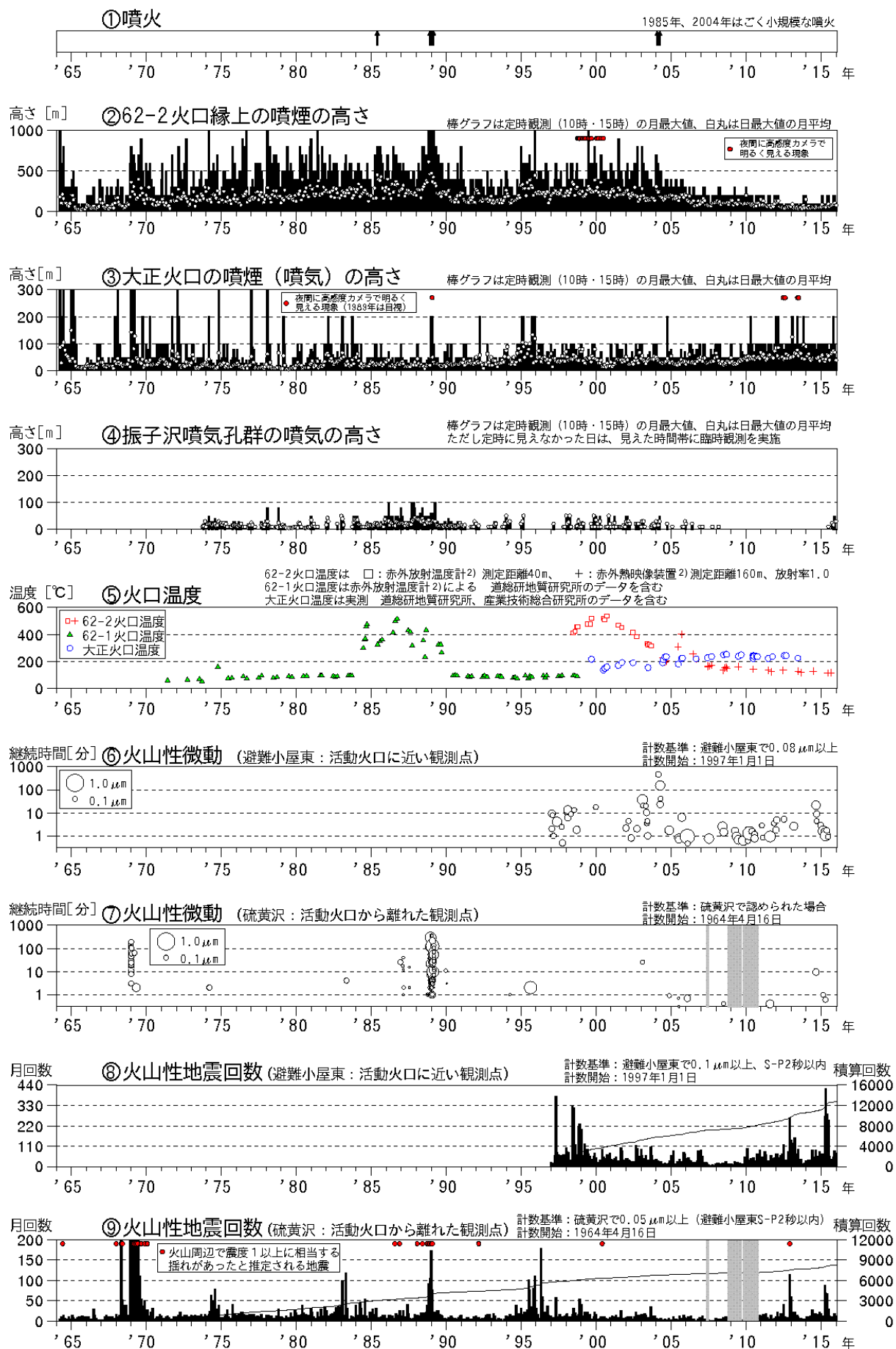


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2016年1月）
 : グラフの灰色部分は機器障害による欠測期間を示します

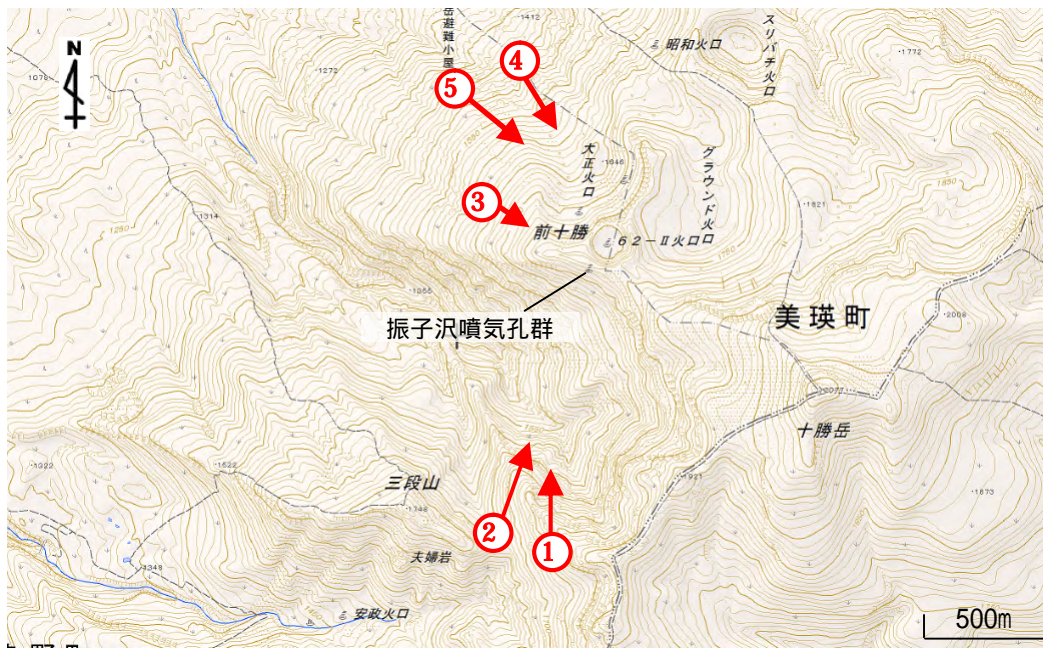


図 2 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向

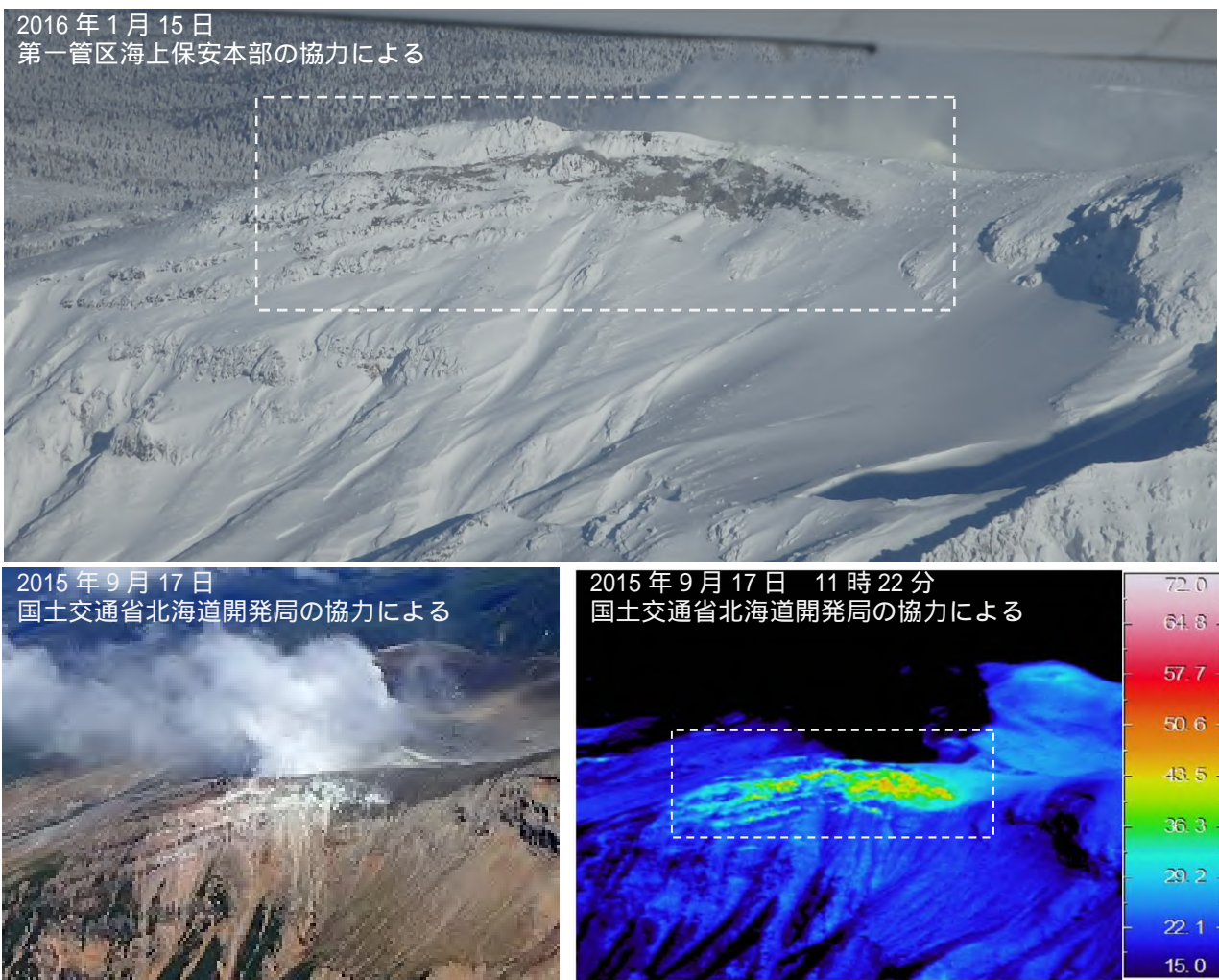


図 3 十勝岳 上空から観測した振子沢噴気孔群周辺の状況

（上：図 2 - から撮影 下：図 2 - から撮影）
同じ領域を破線四角で示します

- ・融雪域の広がりから、2015 年 9 月の上空からの観測で見られた地熱域に大きな変化はないと考えられます。

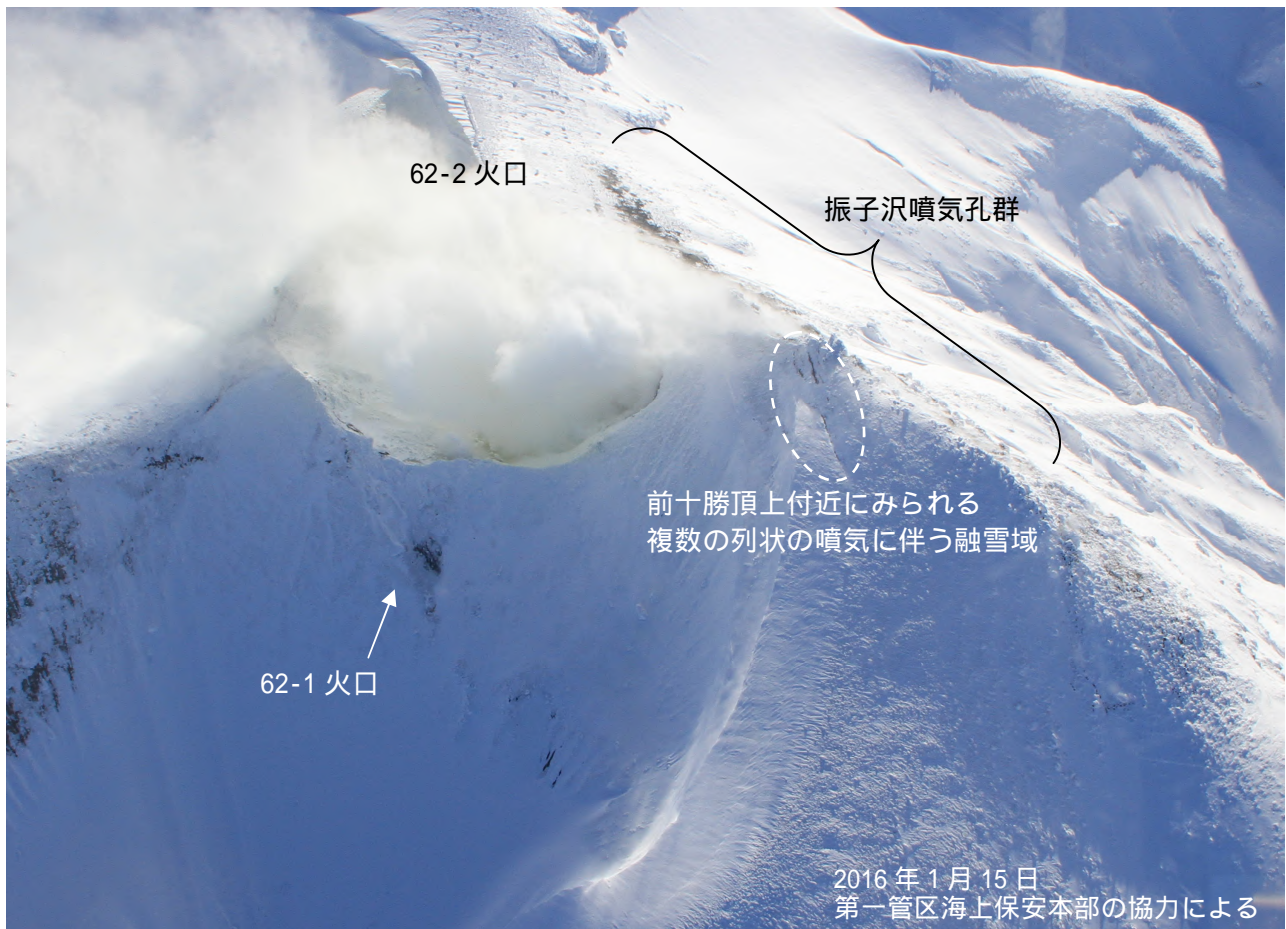


図4 十勝岳 前十勝頂上付近にみられる複数の列状の噴気に伴う融雪域
(図2- から撮影)

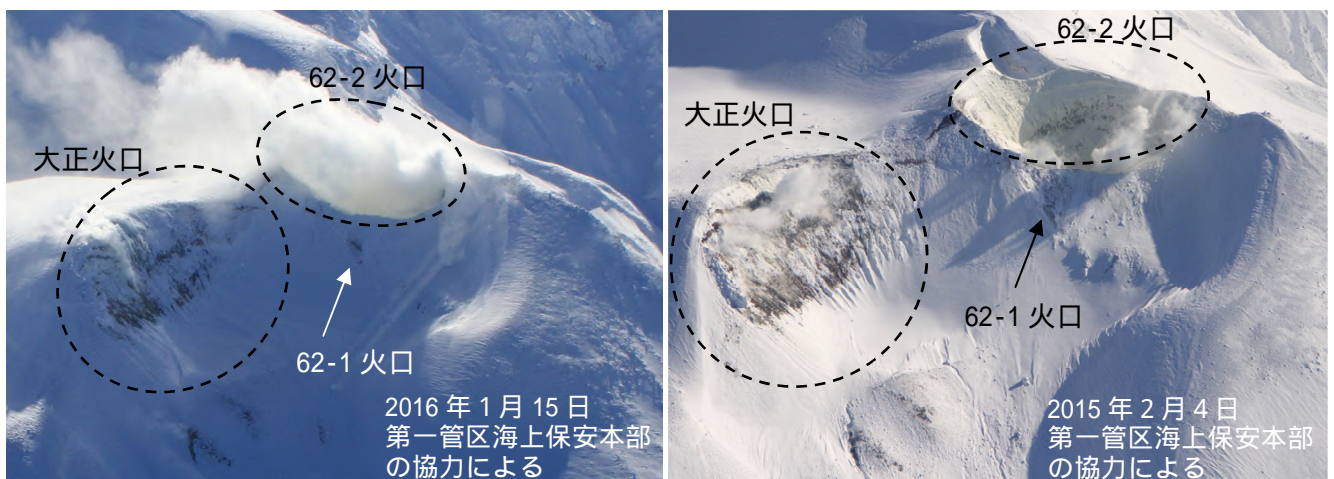


図5 十勝岳 62-2 火口と大正火口周辺の状況
(左：図2- から撮影 右：図2- から撮影)
・火口周辺の融雪域の広がりや火山ガスによる雪面の変色は、2015年2月と比べて大きな変化はみられません。



図 6 十勝岳 北西側から見た山頂の状況
（1月15日、白金模範牧場遠望カメラによる）

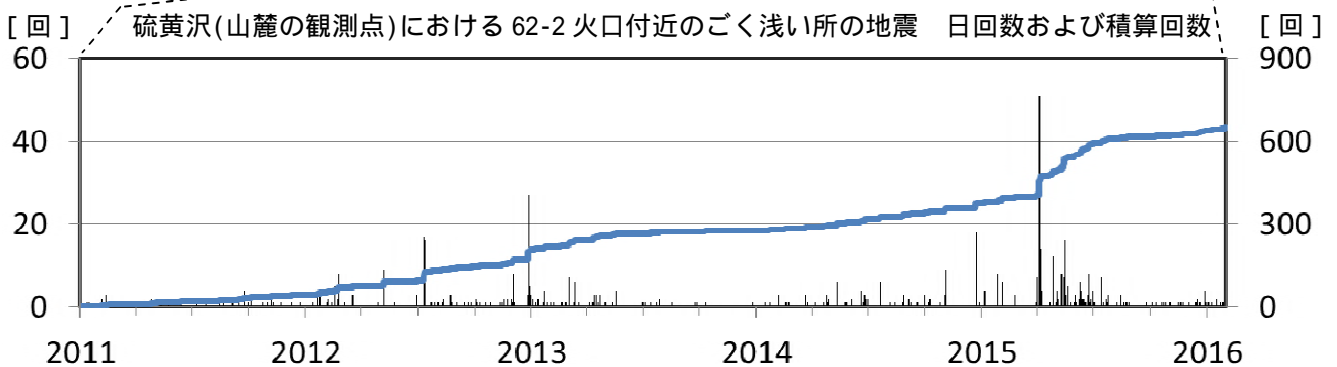
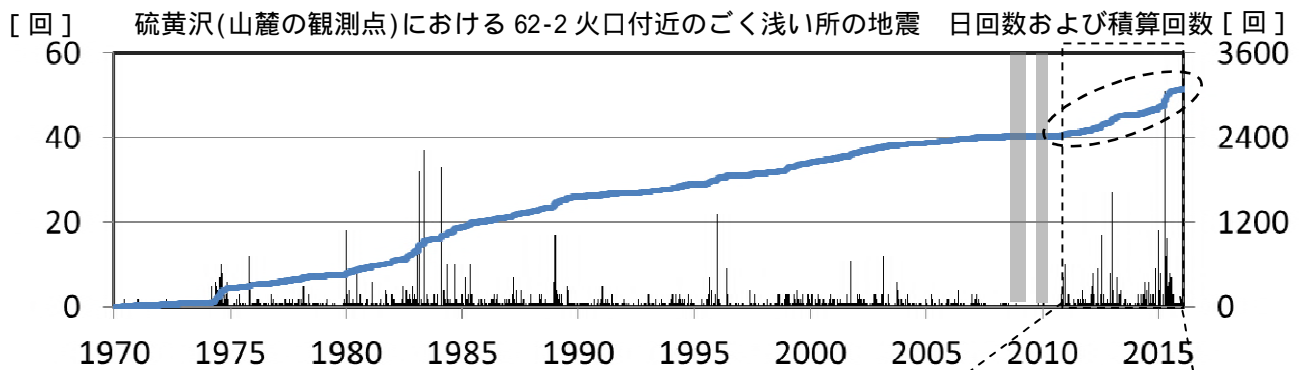


図 7 十勝岳 62-2火口付近のごく浅い所の地震の日回数及び積算回数推移
（上図：1970年～2016年1月 下図：2011年～2016年1月）

- ・硫黄沢（山麓点）で計測した回数を示しています
（計数基準：0.05 μ m以上、S-P 2 秒以内）
- ・青線は積算回数を示します
- ・ はごく小規模な水蒸気噴火、 はマグマ噴火の発生を示します
- ・ 図の灰色の部分は欠測を示しています
- ・ 長期的には、62-2火口付近のごく浅い所の地震は、2010年頃からやや多い状態となっています（上図の楕円破線）
- ・ 62-2火口付近のごく浅い所で発生する火山性地震は、山体浅部のガスや熱水などの熱活動により発生していると考えられます

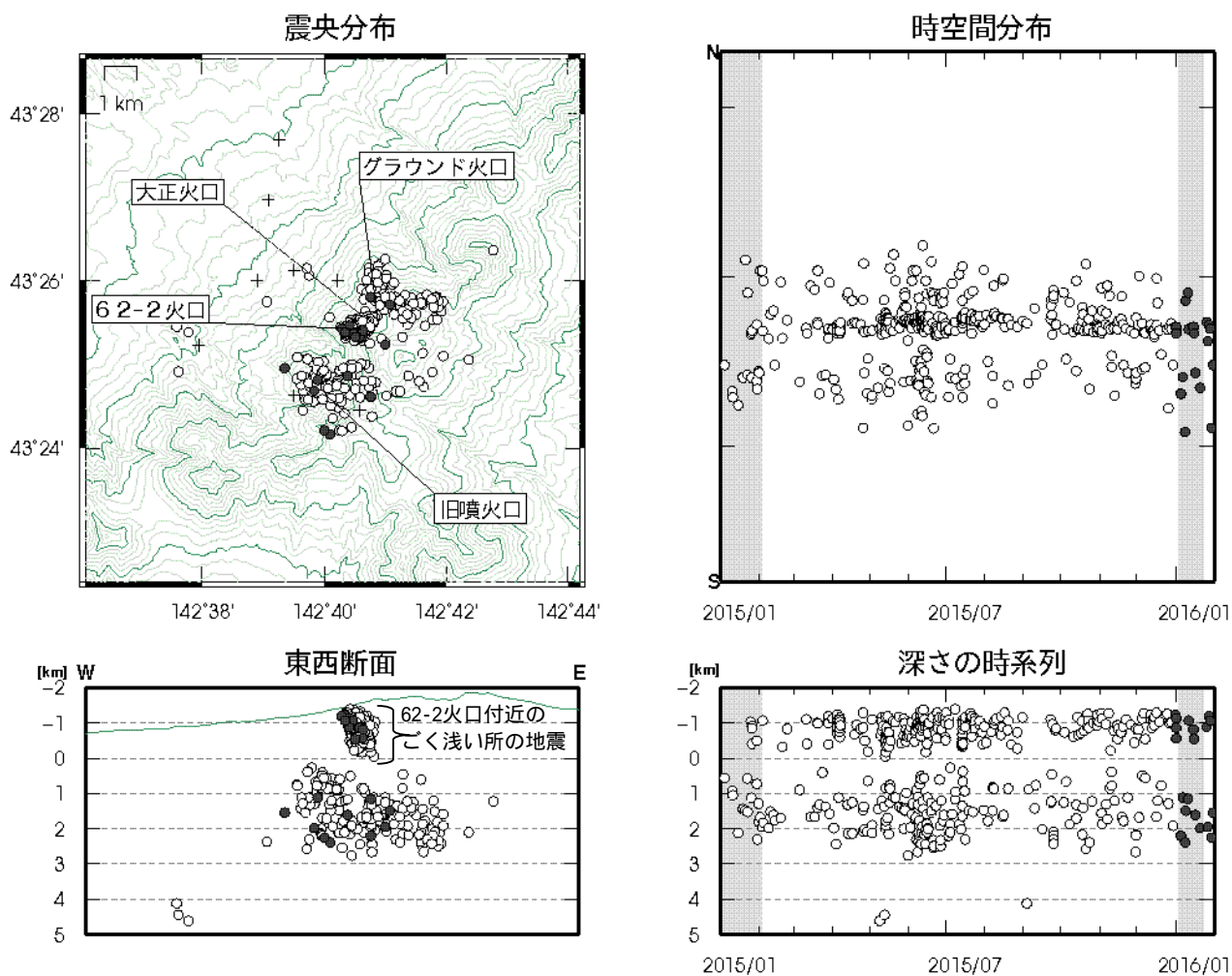


図8 十勝岳 火山性地震の震源分布(2015年1月~2016年1月)
 灰色の期間は一部観測点欠測のため震源の決定数減少や精度低下が見られます
 印: 2015年1月~2015年12月の震源
 印: 2016年1月の震源
 + 印: 地震観測点

① 望岳台-前十勝(道地・北)
南北方向変化

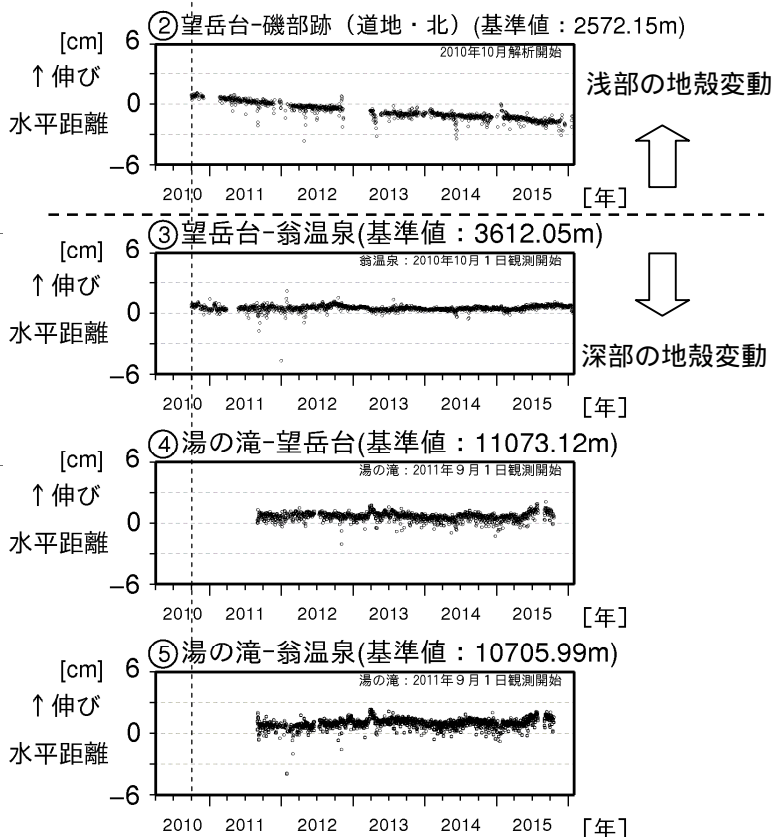
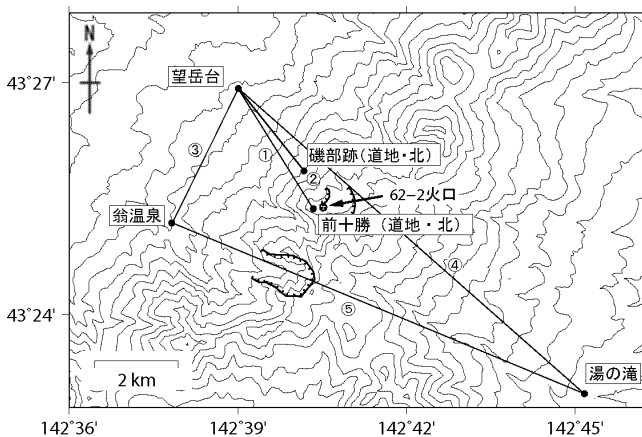
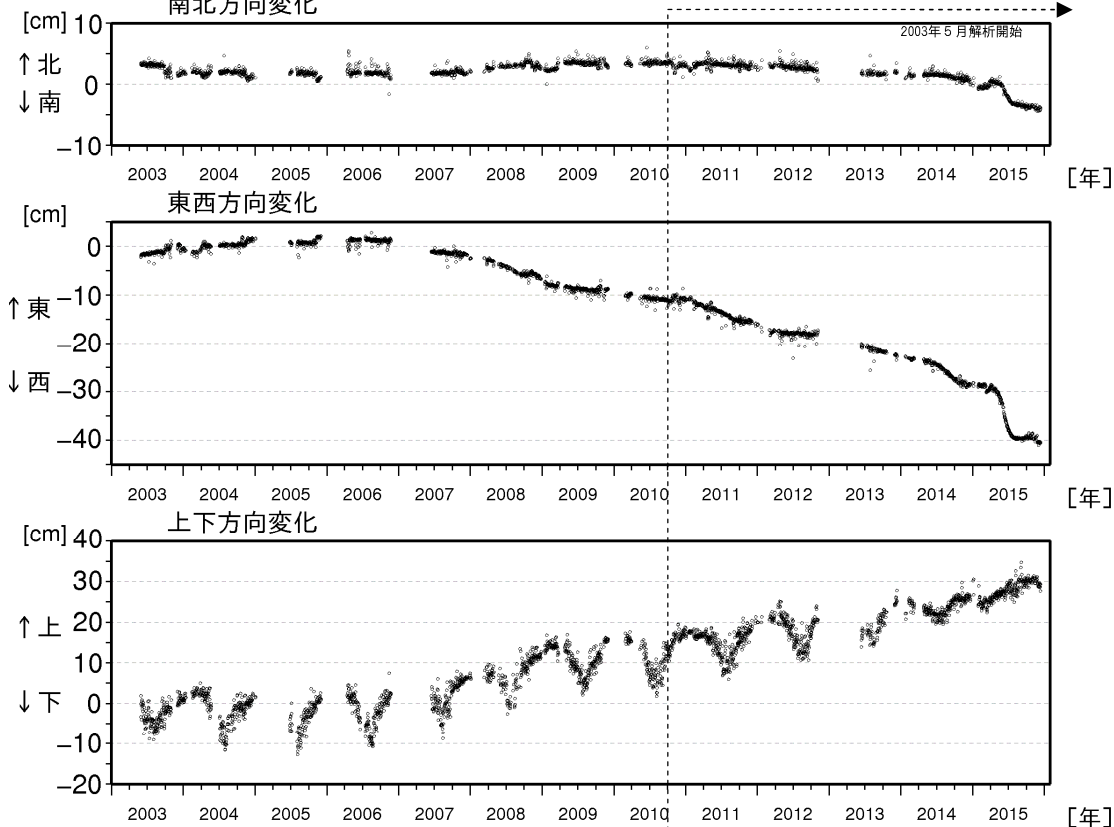


図9 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化(2003年5月~2016年1月)及び観測点配置図
 ・GNSS基線 ~ は観測点配置図の ~ に対応しています
 ・GNSS基線の空白部分は欠測を示します
 ・機器障害等のため、湯の滝観測点は2015年11月16日以降、前十勝観測点は2015年12月13日以降、欠測となっています
 ・(北) : 北海道大学 (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所
 * 1 : 2010年10月以降のデータについては、解析方法を改良して精度を向上させています

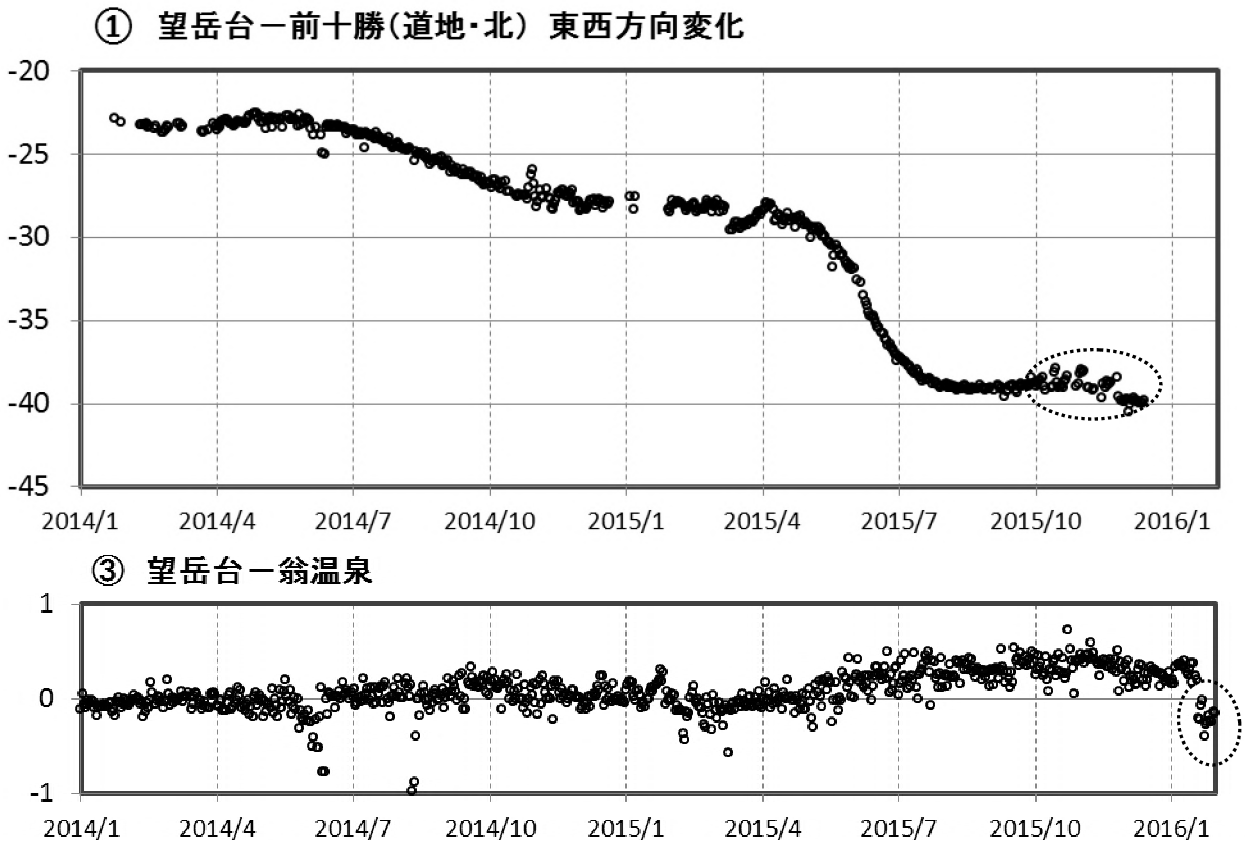


図10 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化拡大図(2014年1月~2016年1月)

- ・ GNSS基線 は図9の観測点配置図の に対応しています
- ・ GNSS基線の空白部分は欠測を示します
- ・ の基線では、火口に近い前十勝観測点に観測点周辺の局所的な変動と考えられる変化が2015年5月頃からみられていましたが、7月以降停滞しています
 なお、前十勝観測点は2015年12月13日以降欠測となっています
- ・ GNSS基線図中の破線内は、凍上や積雪の影響による変化を示します
- ・ より深い山体内の膨張を示す可能性がある望岳台-翁温泉を結ぶ の基線には、特段の変化はみられませんでした。
- ・ (北) : 北海道大学
- ・ (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所

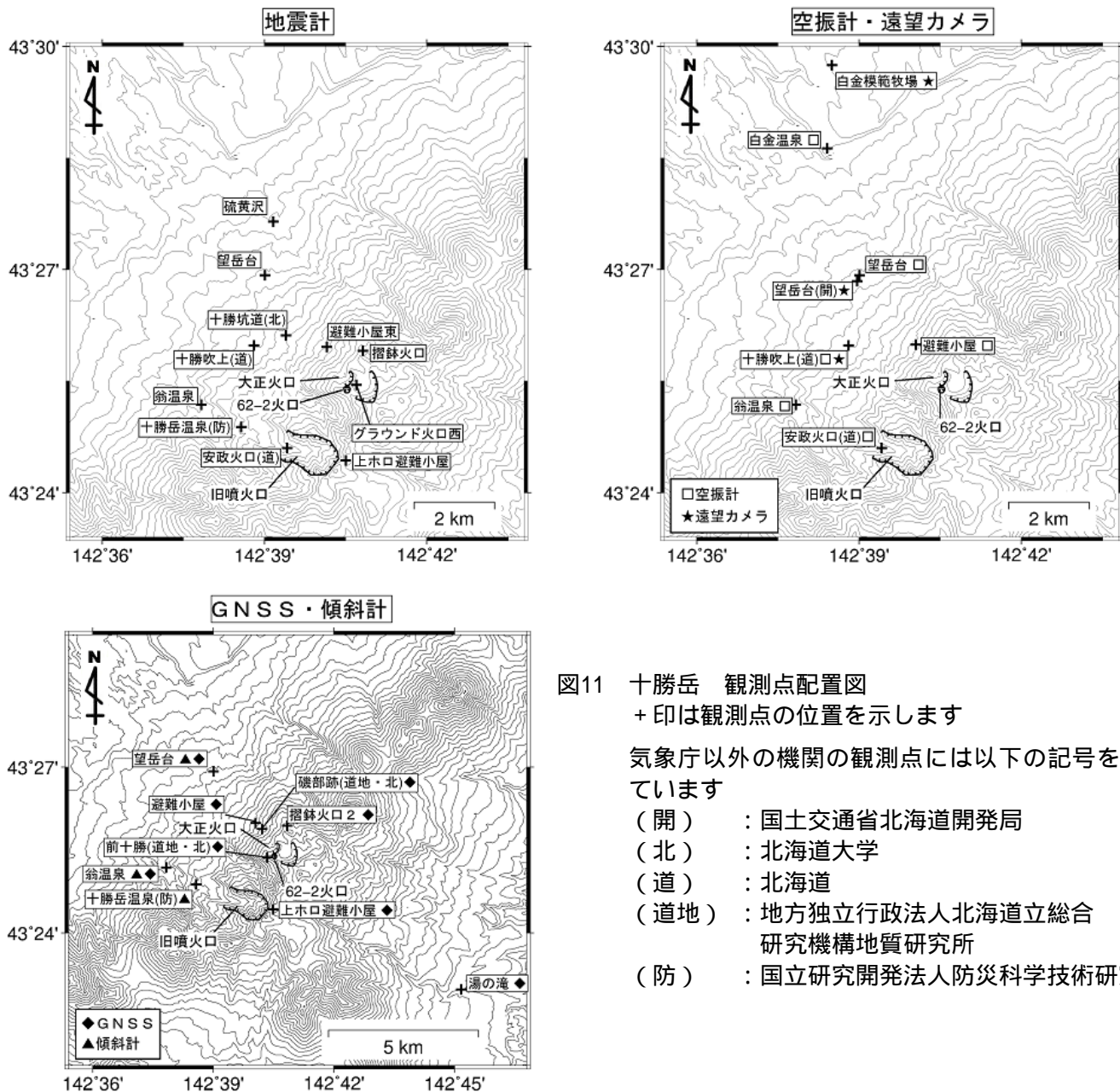


図11 十勝岳 観測点配置図
 +印は観測点の位置を示します
 気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています
 (開) : 国土交通省北海道開発局
 (北) : 北海道大学
 (道) : 北海道
 (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所
 (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所